雜録

紀淑雄ノート

特別
へ一
5112
8

40-9033

秋田文庫

○四時半、曇りふる曉のくらき

起出て雨戸をあくるとゞ先耳ふつくふ鳥の声く、ケユーケユッと刻むが如く啼くくゝ其方を呼醒さんとするやケユーケユと刺ぐが如く鳴くゝ昨夜の夢を語りたふの、此方の廂より彼方の屋根へごと〳〵と羽音させて飛び又すぐる羽づくろひして一間をつゝ向ふへ飛び可愛氣みせて〳〵啼く是崖の上の飛ならひの、カワ〳〵と色氣なき声をつゝる鳥、急に右より左、左より右へごつゝと羽うちて用ありげに飛行くと思ふう方西隣の屋の背に高くとまり四方を睥睨して声高く鳴く、そをと共に一時に幸ふ〳〵遠近の鳥、呼起されて互ひに「お早う」をいふのふぐひならん西も東も唯、鳥の声の乱れ合子

初手は東西南北同じさまに狭霧に包まれ、就中西のうふの濛々として海とも山とも野とも見ふ〳〵半町ばかり離れてゝ〳〵ゝ社の家も薄

鼠の中に埋もれ白ペンキ塗の洋屋ゴミ溜まりおびゝたゞしき窓の硝子りの
を見せて勝のつる貞東無〳〵
空も一つゝ灰鼠の色を成〳〵、まめ〳〵〳〵空氣、見るうらゞ重さしこ
ナラゴのり迫るうちいつとなく喧くなりし家鶏の声又いつ〳〵ゴの羽
るなり今も只遠方のみ聞ゆ、たちこ、う〳〵こまり易りそむる竜の
煙、そもも柔らる横〳〵なびく、高くも、颯〳〵、前哉の樹も戦ゴなび
北方(北)一聊なびくを見れば南の方の風の氣あるなり
雨戸を繰る音、井戸車の音、水を斟み込む音所〳〵に聞え近く聞え
太鼓(朝題目の太鼓の時の太鼓)やゝ遠くきこゆ降りのさゝゴ
くなり〳〵なり
又こなゴのりも迫ぎ〳〵る、近隣子人の足音、下駄の音きこえ始め
サハ〳〵と音たゝる竹箒をて庭掃除をゝゴゝなり同時に本余

寺の朝勤の鐘、未久りゝる空氣よりてきれ沈みて沈んできこゆ
ひふの屋の背に南の如くこゝりてなり〳〵二羽の鳥様子なりゴ四方を見
廻〳〵し時急に離れて飛行く、トメこゝ〳〵こゝ近き家の柱時計の
音高くひゞき時已に五時となれり〳〵といつ〳〵の小鳥の音四方に起り何とふく
出氣勃興に、暮方のそ〳〵きといちゴひ我知らに力張く覚え、嬉〳〵
勇まし〳〵、
東のうゝの霧立ち薄らぎ洋屋の屋根ゆゝしゝ〳〵今も金くなら
ちなりのこゝ山附をも、〳〵附東のうゝ山ボウとほかうみを帶びそえ〳〵ゴ
見る間に其ほゝ〳〵みゝ東の空に殺り何処ともふく嘆月も知らに一
面に東のうゝほのゝみゝり蓋〳〵大陽ゴ霧を隔て〳〵已に高く昇り〳〵
ならゝ
大方昨夜もく眠らゞ汗を守りて吠え〳〵、今やゝ〳〵起出く蓋の中

そゞりあるく、鳴声も絹をこゝろ
二番すゝ起出る家く、雨戸を繰る音、小鳥の啼く声、あくびの声、咳
拍ひの声、寝ぼけ太郎を破る洞笛の声
今ら四方全く明るり
「豆や、豆腐豆腐」とぶ〳〵ぬけるひ〳〵表通の賣声、意味なさ〳〵
人類らしき声ふれ〳〵名色笑番〳〵て下駄音喧嘩いちゞるくなる、格
子戸のがら〳〵と鳴る響、呼とめられる豆腐の家をひ
鳥の声ら依然として〳〵〳〵〳〵ぞ何処となく喞さる人語思ひな
しこの間まくきこゆ
樓を下りて親〳〵前栽を見渡せば石榴の花の目醒めるるが如き紫陽花
の眠気はらう對〳〵小笹の露を含みるふ柳の俯むきおのゝきを見ればぐる〳〵、
いつもの今起るるまなり、寝ぼけ心ぜちきい朝ぐ〳〵ま、何故に晏起を好む

昔の人きは、他人ら考ざらく指く、何故に自ら晏起にるる噫、
たゞ考て疲の味を知りそめ〳〵あり

○山王臺の所見（午后五時半）

灰鼠色の雲蒼空を渡る、其のろ〳〵と〜ふる歩み、市街の熱閙を似て脱塵といまこと又見なるべし——只一羽高く舞ふ鳶、こゝも超世の伴侶なり

車声轆々又轔々、馬ひつ〳〵ふる鈴、鎖、ステーションの呼鈴更然とひゞく汽車の出発、汽笛の声、意味をふさぬ人語、うんぢ〜っふふ兒の叫び声、所きらの太鼓の音（とみもゞ織ふゞ如ち往来ゐいちゞふ〜く目ぶつ赤き頭巾見る角兵獅子せ）

耳えこひゞく鐘の声を梢を鳴らす風の音ゑ溺を却りて目の前なる雑竹のサハ〳〵と音たゝゞが耳ゑつ〳〵頭上の鳥の声も遠く又空虚まき

こゆ

本願寺の屋根、人造富士、清竹の李堂、五重の塔の尖頭其他寺々の屋根おの

づゝら目より入る
日光わ童子洗物の方より映射し忽ちまして暴れど人造富士の雪鼠色
となり洗物の杜わ輪郭をのりとなる（但し近眼の所見）
空となり走る職工はゝ〻而目より入ふら所さのつゝぐ、生活の全部を之満
せる走る〜〜もつゝぐの翻るを見て何となく心勇む蓋し生活の躍然い
れば也
高きより打て眼下の往来を見下せいろはウナ奴一個も見えず来往恵
く豆の如し之ら蹉跎奴等そも何事そを営む

○小説神髄より抜萃

美術の本義

美術ハ人の心目を悦ハシメ且ツ其氣格を高尚ニスルナリ

美術の区別

有形（色彩ト形容トヲ主眼トシ形ヲ主トシテ人の眼ニ訴フ）繪画彫刻嚴木繡織銅器建築園苑等
無形（人間の情ヲ主眼トス。音樂唱歌ハ耳ニ訴ヘ詩歌戯曲小説の類ハ心ニ訴フ）音樂詩歌戯曲等
羅まんす（奇異譚）より浮へいぶる（寓言の書）行ハルニ到ル亜れごりー（寓意
小説（勧懲ヲモテ主眼トス物語ヲモテ方便トス）ハ草紙ナル浮へいふるの進化変遷ニテ発達セシメタルモノ歟
勧懲小説ハ物語ヲモテ本尊トス勧懲ヲモテ粧飾セリ源渕小寓意小説ト相同シク浮へいぶるヨリ生タレトモ
其性質ハ大ニ異ナリ故ニ寓意小説ニいろふる不條理の脚色アリトモ何等の荒唐
ナル詭アリトモ寓意の巧梅妙ナリセハ之ヲそーるニ比ルナレモ若シ勧懲小説ニシテ
其本尊タル物語ニ咲く奇怪の脚色アリナハ勧懲の主旨ハ通スルトモ之ヲ巧妙ノ小
説トハセシテ猶〻カタカルヘシ

演劇ノ性質タル真ニ通ジ（キモノニアラス）嘘ヲ真ニ越えつべキモノナリ即チ現ニ
生ルヲカツク演劇ノ脚色ヲ論シテ演劇ハ弓ヲ結果ニ結ブベシ偶然ノ事ヲシテ其團
圓トハナスベカラズ

小説ノ種類ヲ表スル略圖

- 假作物語
  - 尋常ノ譚（小説）
    - 勸懲摸寫
    - 現世（ソシアル）（世話）
      - 上流社會
      - 中流社會
      - 下流社會
    - 往昔（ヒストリカル）（時代）
  - 奇異譚（羅マンス）
    - 嚴正
    - 滑稽

小説ノ裨益

（直接ノ利益）小説ノ目的娯樂ヲ人ニ与フルニアリ換言スレハ人ノ心ヲ娯マシムルニアリ

（間接ノ利益）一人ノ氣格ヲ高尚ニスル事　二人ヲ勸奬懲誡ナス事　三正史ノ補遺トナル事　四文学ノ師表トナル事

文体論

雅文体　其質優柔ニシテ閑雅ナレハ婉曲富麗ナ文ヲ以テ適ス
左れと活潑豪宕ナ氣ヲ缺ク

俗文体　峻拔雄健ニシテ勢力アリ追懷蒼然ノ趣ヲ缺ク

雅俗折衷文体　甲　稗史体　雅言七八分俗語三四分ノ雅俗折衷ノ文ヲ用ヒ詞句綴ルヲハ雅言五六分ノ一
乙　世説体　甲ト異ル所ハ章ニ俗言ヲ用フルトアルヲ以テ優言ヲ用ヒタルトアリ

（稗史体ヲ論スルニ去ル時ハマヽ二ツ三ツアリ　曰ク音韻轉換　曰ク意義轉換　消ヱ〜人ハ六ツ教七故ハ
ヱ〜朝ト去ケヘヱ〜　此二法ハ文章ノ上ニ作者苦心ノ明ラカニ見ラレ、
ツ拙ニトスルナリ　曰ク古語歌ノ用ノ法　月れぼろろん〜出て池ひろ〜山こぶかきわいり
ぼ〜やらるる志〜ハ（いらふられいいほの中に住まどかい世の　心細げヲ見やるるも住けられいろ「若ほのあかしお
うき事ヲきてこそ〜ん」）　曰ク題目描成法

脚色ノ法則

脚色中ニテ忌ムヤ病

古めかし（時代小説）
堪らぜかし（悲哀小説）其結局ハ悲話ノ如キハ決シテ
スルヲ要ス　且輕ヤカニ致スヲ要ス

一荒唐無稽　二趣向一轍　三童復　四勸懲漫藝　五好惨偏頗（悲哀物ノ上ニ用フヘキ）

事ニテ脚色ニ関スル事ニアラズト

六 特別保護 好婦ノ偏頗ヨリ生ズル事ニテ、コモ其人物ニ関スルコトナリ 矛盾撞着 脚色ノ上モイフベシ 事ノ上モイフベシ

矛盾撞着

作者ノ矛盾ヲ誇示スル事ナリ 作者ガ傳奇ヲバ知ラレザランカト伐ルレル宜シ

紙ノ世ノ女ヨリ其満腔ノ女子識ヲバ其折ノ便宜ヲ見テ読ムノヲ待セバヤラ心ヲ用ヒテ叙ブベキホドリ

七 詩趣欠乏 安言ノ文字ニアラズト手意ハ傳奇ノ音趣欠乏トイフ事ナリ夫レ小説ハ世態ノ模写ヲ叙スルモノユエトモスレハ其脚色モ楽シ無味ニテ傳奇中ノ趣ヲハ其脚色中ニ調合シテ人ヲ倦マシメザル工夫ヲタスベシ 譬ハ惟シテ知ルベシ

詩趣欠乏

續淡ヲ生セハトテ興味ヲ可シ

八 永延長滞 あまりに物語(特に續詩を延引ス事 ものがたりを乞フ 読者ガ忘れる嘆コリ易カリ故ニ此等ヲスクハンタル時ニ傳奇中ノ趣ヲハ其脚色ニ調合シテ人ヲ倦マシメザル工夫ヲタスベシ 譬ハ惟シテ知ルベシ

永延長滞

暗闇ジニヤリ如キモノ是ナリ余ハ惟シテ知ルベシ

人物ヨリ〻〻屢〻モキ復歴ヲ語ラ〻ムル事

時代物語ノ目的ハ風俗史ノ遺漏ヲ補フト正史ノ缺漏ヲ補フトノ二点ニアリ

正史物語ヲ編ムニ臨ミテ作者ヲ屢〻醸シ易キ疾病ニシテ足ラサルトモ其意ナハ茅一ハ手代ノ錯誤 第二ハ 風俗ノ謬寫是ナリ

第三ハ 事実ノ錯誤

西方ナル愚春ノ人物若シハ怯懦ナル人物ヲハ主公トスコトハ忌ムベキナリ何トナレハ此等ノ西方ナル本尊ハ唯ニ讀者ノ感奮ヲ奪起スノ力ヲキノミナラス中ニハ讀者

時代小説の脚色

主人公

主公ヲ造作スル二流派アリ

ヲシテ其西方ナル弟蹟ヲシモ知ルヲ嫌ハシムル傾向アレハナリサハアレ滑稽ノハ流ハ此等ノ種類ヲ主公ヲ用ヒテ却リテ大功ヲ奏スル事アリ故ニ滑稽ノ著作ニ於テハ之ヲ用フルモ好ケレト他ノ着実ナル流ニハ勉メテ之ヲ忌ムベキナリ

一ヲ現実派ト称シ一ヲ理想派ト称ス所謂現実派ハ現ニアル人ヲ主公トスルナリ即チ現存社會ニアリフレタル人ノ性質ヲ基本トシテ假空ノ人物ヲツクルコトナリ、所謂理想派ハ之ニ異リ人間社會ニアルベキヤラムル人ノ性質ヲ土台トシテ假空ノ人物ヲ作ルモノナリ、現実派ハアリフレタル人ヲ材料トシ理想派ハアルベキヤラムル人ヲ材料トス是ソ相異ナル要点ナリ

存在キヤラムル人質作ラニモ拘ラズ二方法アルベシ

所謂失天法(演繹法)ト後天法(歸納法)トナリ失天法トハ已ニ定断セル理想上ノ性質ヲ仔細ニ分析解剖シテ篇中ニアラハルル主公ノ性質ヲ造ル下ノ場合ニ応用シタルカ如シ(但シ時代物ハ此法不当トスベシ) 後天法(歸納)ハ

理想派 ─ 先天法
　　 ─ 后天法

二者ノ得失

現実派ハ前ノ二者派ニ異ナリ

現実、理想ノ難易

前ト同シカラズ作者カ想像ノカヲモテ此人鬼ニアルベキヤウナル種々ノ性質ヲハ撰集メテ程ヨリ之ヲ調合シ以テ人物ヲ造ルノ法ナリ故ニ此法ヲ用フル作者ハ童ニ実験ト觀察トヲ其必須ノ手段トシテ人ノ性質ノ原素トナルベキ種々ノ性情ヲハ造レルカラ前ノ失派ノ作者ノ如クニ余リニ極端ナル空理ニ走リテ人ラシクモナキ人間ヲバ造ル程ニハイタラヌナリ

現ニアル人ヲ主ムトスルナリ所之即チ君ノ如キ即チ是ナリ（田畧）之ヲ要スルニ現実派ハ其門ニ入ルニ易クシテ其室ニ登ルニ難カリ其故如何トナレハ前者ハアリノ儘ノ人情ヲハ寫シ出スヲ主トスルユエナガチ作者ノ工夫ヲモテ完美完善ノ標準ヲハ製作ス（中略）要ス併ルニ后者ハ之ニ反シテ醜美善悪曲直正邪総テ作者カ理想ニヨリ且其工夫ニ出ルカユエニ先ツ預メ独断モテ醜美ノ標準ヲ定メテ扨善悪ノ人物ヲハ作リ設ルヲ必要トス而シテ件ノ標準ニシテ若シ充ラズ高尚ニ過ルトキハ人間ニハ似又人物ヲハ造リ出スルコト間々アルナリ是オノ准義ニシテアレド只標準タニ過不及ナクハ其全ハ作者ノ意近ヲモテ造作スルコト易カルベシ現実派ハ之ニ反シテ入門ノ后ニ苦勞多カリ物ニ喩テ之ヲイヘハ現実派ハ人間ノ形ヲ畫ク畫工ノ如ク理想派ハ天人ヲ畫ク畫工ノ如シ人間ノ形ヲ畫キ得ルモノハアレトモ天人ヲ畫キ得テ神ニ入リタルモノハ尠シ天人ヲ畫キ得ルモノハ尠ケレトモ或ハ畫キ得テ人ヲ感セシムルモノナリカシ相違ノシカラシムルモノナリカシ

人物ノ性質ヲ叙スルニ二ツノ法アリ

假リニ命ケテ陰手段陽手段トス所謂陰手段トハアラハニ人物ノ性質ヲ叙セシテ暗ニ言行ト手動トヲモテ其性質ヲ知ラスル法ナリ我国ノ小説者流ハ概ネ此法ヲ用フルモノナリ陽手段ハ之ニ反シテ先ツ人物ノ性質ヲバアラハニ地文モテ叙シ出シテ之ヲ読者ニ知セヨウトナリ西洋ノ作者ハ概シテ此法ヲ用フルモノ

想ヒ右者ヲ用フルハ前者ヲ用フルヨリ難カルベシ蓋シ陽ヲ陰ヲ用ヒントスレハ
先ツ須ク心理文子ノ綱領ヲ知リ人相骨相ノ文理ヲモ會得セサレハ叶
ハヌナリ去レト其優劣ハ速斷シ兼ヌルナリ

○麻つれル彌ふとん論より抜萃

蓋シ兩兒頃ハ其詩才ノ毫モ氏ヲ因繼セル開明ヨリ刺激ヲ得ス其習ヒ得タル
学問ヨリモ亦然ルヲ知リヌレハ言語ノ單純ナル感情ノ活潑ナル古昔ニ生シマホシ
シト思ヘルノミ

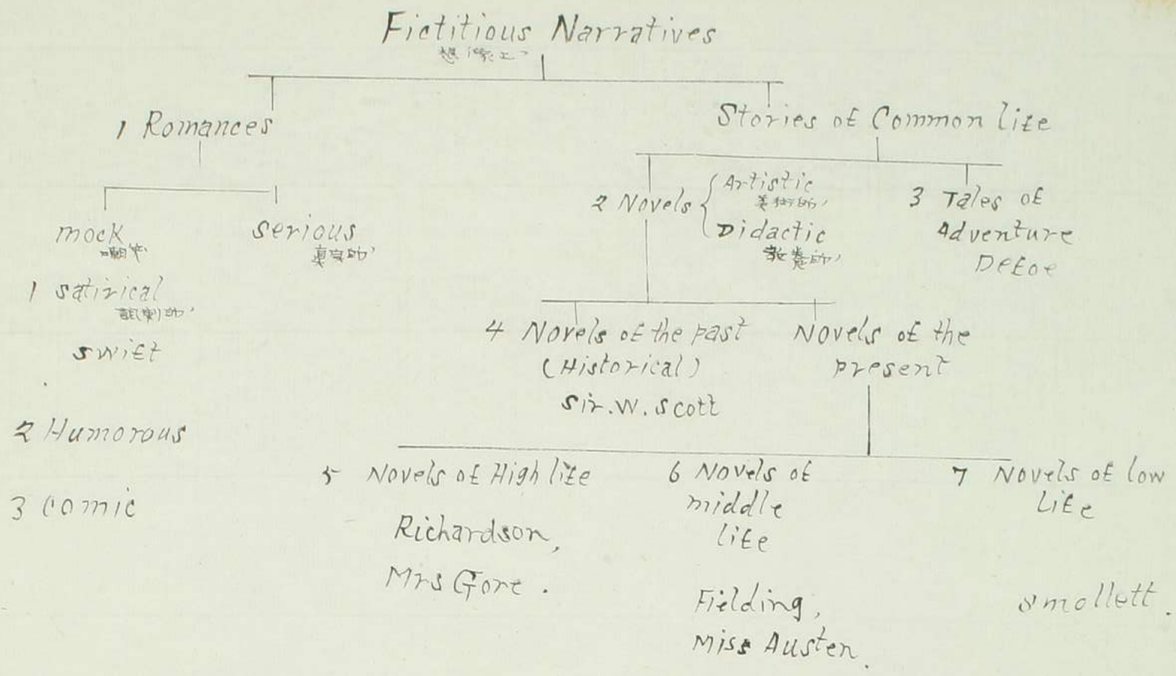
蓋シ文明ノ進歩ハ猶ホ模擬ニ一層能ク適シタル音ヲ以テ供給スルヿアリ文明ハ実
ニ音樂師畫工彫刻家ノ器械的ノ働ニ必要ナル器械ヲ改良スルヿアラン然トモ
詩人ノ器械ナル言語ハ其最モ粗野ナル有様ニ於テ最モ善ク詩家ノ目的ヲ
適スルヲ奈何セン蓋シ國民モ一個人ノ如ク最初ニハ視察ヨリモ事トスルモ世ノ
進ムニ隨フテ推論スルニ至リ首形ノ者ヨリ無首形ノ者ニ至ルヲ特別ナル形像ヨリ一般ノ言語ニ進
ムヤリ故ニ開明社會ノ言語ハ哲学的ニシテ未開人民ノ言語ハ詩学的ナリ
シエキスピアー、句ニ曰ク想像力ハ能ク知ラレサル事物ノ形狀ヲ構造スルニ隨
ヒ詩人ハ一枝ノ筆ヲ以テ其事物ニ形狀ヲ付シ之ニ位地ヲ與ヘ又隨フテ名ヲ余スト

事理に基づき論ずるアリストテレス哲学の事理に基づき論ずるプラトンの事理
及び狂言者の事理なり、次に再び推論に左の如き事理論ありて前の
事理と結合せり

著名なる人にして美学上事理論の問題に解答を与へたる者は
ヘーゲル氏の結合説なり

○左に明治十三年三月十九日発行の『東京学士会雑誌』第二号に載せたる
落合直文氏 Herman Lotze 氏の説を訳す

Tragedy Comedy 又は其他の事理に於ては同じ目的を持つものなれども
左の結合説なるものは次の如し曰く
凡そ有形の性質を物質と人間に樹して言ひ顕はしたる形象上の弱点
を補ひ得るものなれども如何なる時に言ひ顕はすか一定の天然（注：
Nature）の法則なるか時に人間の意志なるか時に人間の意志と
天然の調和なるか時に人間の意志に於て形式的調和適合の
ために用ひられたる時更なる事理の相異なるか故に左の如く
Tragedy に於ては事件の一種崇高なる性質（人物）を極て強大なる
力を持て人間の本能力と戰ひ遂に勝を得て敗滅せらるゝ
ことを以て Comedy に於ては主として人物を鎮静なる結果と


Fictitious Narratives
想像上の
1 Romances
Stories of Common life
mock
嘲笑的
serious
真面目的
1 satirical
諷刺的
swift
2 Humorous
3 comic
2 Novels
Artistic
美術的
Didactic
教養的
3 Tales of Adventure
Defoe
4 Novels of the past (Historical)
Sir. W. Scott
Novels of the present
5 Novels of High life
Richardson,
Mrs Gore.
6 Novels of middle life
Fielding,
Miss Austen.
7 Novels of low life
Smollett.

○

[illegible]

ゲエテーヲ恐ル、代ハ畫工ノ如クシルトルヲ哲学者ノ加ク、ショウソ代ハゲエテーヲ以テ寧ロ哲学者ナリウオーブヨーズヲ共ニ詩人ノ片輪トシテ見ル、ヽヽヽ云ヽ（中略）何故ニ汝ハ詩人ノ片輪ナルカ ゲエテーハ言ヒ外来物ノ補助ヲ利用セ故ニ哲学者ノ如ク思考力ヲ貴ビ、ヽヽヽテ寧ロ経驗ヲ応用セ故ニ哲学者ト正反対ニ立ツ畫工ノ如ク

（古国民新聞二月廿四日付録）

○文学者ト徳義

畫かんと欲せば自ら感ぜざるべからず、真正の文学者には真正の徳義を要す、曖昧家庭の内に其心を清くまゝ者い幸ひなり、日毎に恩惠深き父母の手を握るもの幸いなり、飾りなき世界の中に懼るとなく、誤ふとなく語れ、敵に向ては勇氣と柔和とを向けよ、朝る者に向ては黙せ、詛ふ者に向ては静に爾の徳を示せ、而して常に爾の胸をして自由の炎を熾にし、毫

屈する賤しき利慾に心を傾くるふうれ、蓋は自由と利慾とを両立させるものなれいなり、富は自由なる人を尋ねず、静かなる所なる人らを、徳義の右れ奔らず、正しき人の前にかくる、若し爾富て思はゞ現れ已に爾の思想は奴隷となり、爾の心若し高ければ、真正の名誉は求めずして自ら爾に来らん、そは爾常に眼を天に注げ、而して其高き所より享得なる、純潔正大なる精神をいて、人生の改革者となり、失望者となるべし、斯くて爾の所既に冷かなる時に於てすら、世界に向て或る善を為さゞる、時に於て真正文学者の天職実に斯の如し、我邦現今文学界此種の人物果して幾人かある、吾人私に於て覚つず天を仰て涙数

（右日本評論　二号）

○文学の解釋

左に佛国の一流家なる一詞にて文学雑誌より抜粋せり

Literature is the daughter of Heaven, who has descended upon earth to soften and to charm away all the evils of the human race.

○和歌よみ方（文学雑誌）

鈴木弘恭

前号　さて尋常の歌は三十一文字にまとまりて夫れて意味かよく通じすべすべるゝ事に成（下略）三十一文字とは最初に五字句次に七字句次に五字句次に七字句次に七字句是れにて三十一字なり然して才一、才二才三なる五七五の三句十七文字を上の句と申し才四才五なる七七の二句十四文字を下句と申す……柿本人麿の歌をもて能く一句一句味はひて見

おいて大抵詞のつゞけざまはおわかりにちる〳〵

はるすぎて（五字）なつきにけらし（七字）しろたへの（五字）ころもほすてふ（七字）

あまのかぐやま（七字）

あしびきの（五字）やまどりのをの（五字）しだりをの（五字）ながながしよを（七字）

ひとりかもねむ（七字）

さて又天智天皇のお歌山辺赤人の歌小野小町の歌などは三十二文字づゝあるのは長い字餘りの句が一ヶ所づゝあるゆえなり然るに此の字余りの句となるものは必ず五十音のうちの あいうえおの五字のうちに限らこれなし

天智天皇のお歌まこの句

とまをあらみ（六字）あ字餘り

山辺赤人の歌まこの句

うちいでゝみれば（八字）い字餘り

小野小町の歌まこの句

はなのいろは（六字）い字余り

これらの例ばあいうえおのうちの字があれば何番目の句にありての指支なし字餘りの句が一句あれば三十二字になり二句三句あれば三十三字あるいは三十四字になることあり然れども句毎に字餘りなるいかゝ初めのうちは成くは字餘りの句を用ゐて〳〵て易らかによむが宜しき事となる又

古人題を設けて歌をよむとまれば春の題と雖古にも春まい春冬の題と設けて詠むる言〳〵くまで然〳〵て一首の内に同〳〵詞が二ヶ所まで出るいあ〳〵く又假令に上の句に梅の花とありて下の句にもまた梅とか花とかあるの類又上の句に鶯とありて下にも鶯とかうぐいすとかの声とかあるの類なり然れども上句にありても差しかゝわる例に又

く詠みあるせば同〳〵詞が上下にありても差しかゝわる例に又

なにはつにさくやこの花　ふゆごもり
いまはるべしと　さくやこの花

ふゞの類ナリ

さて人々が詩歌もむづかしきやうに思ふのは、語格の事、辭と用もの、用ゐ方がかつ〳〵むづかしきやうに見わる故なり。

美文部者枚の語彙別記一冊　本居宣長翁の詞乃玉乃緒七冊　本居春庭翁の詞乃八衢一冊　詞乃葉打聽一冊　なども記者ふさはしい我々日本固有の語格なれば規則正しく出来れば少し考へばかばかしき事なり

歌の書類

古今集（後撰集と拾遺集とを加へて三代集とゝいふ）
拾遺集、金葉集、詞花集、千載集、
新古今集、といふ五部を加へて八代集と申せり

ほんとに望まば　萬葉集、廿一代集　併し大部分は八代集位をてまに合せてもよろし

学雜誌　百九十二号

○真の詩人

詩人の道貴者ふり、　万物の代言者なり。　人情最深の谷を穿てよ、其處に詩の泉湧ら人、　詩人は之を堀り上に噴出せしむ。　詩人は権衡に據らず、　階子も登らず、　一躍して天に上り、　忽焉心の心に徹入す。　其歌ふ所は万人の情、　其言ふ所は万代の道理、　其信ずる所は天世の信仰なり。　詩人の真の詩は学問の研究なる所、　議論の断定なる所と同一なり、　詩人は学者中の学者、　教師中の教師なり、　真の詩は学理の玉なり、　議論の粹なり、　信仰の結晶なり。　真の

人情を知んと欲せい詩人に聞け、　奥の人面を見んと欲せい詩人に聞け。

道中の文才

○哲学道中記巻一より抜萃　井上氏編述

一 論理学、　二 心理学、　三 社會学、　四 道德学、
五 審美学及ビ宗教学、　六 純正哲学、

汎意 ambiguity の種類

第一 語音より生ずる汎意（流る川に鬼の棲む　蕎麦の花　五官の事の類）

第二 字形より生ずる汎意

第三 連想より生ずる汎意

（甲）日本語のみより起る汎意

（一）通常の談話より起るもの

菓子屋と貸屋と。石海と紙海とを聞違ひ。石生大事や金ほしやと知高大酒や金ほしやと誤る。

イドカナル、林ニカヽル暑カナ」とをふ一句を「蝦が鳴く、ハヤ死ニタヽル暑カナ」と誤みるもの類。

假名つ讀違ひより起る汎意

地名又は物名より起る汎意　越后番京郡に天田と姓する者あり、茨城に赴きて其名を問ふに、やがて音「耳ニ聞ふに同じくやがて答られ大に怒り」其意を立去りしとをふ是れ姓名すら知らずしてイヤガと答へたるものと考へらるゝに由る（頓て偶然に汎意を生ずることは多し）

方言より起るもの

土地の讃癖俗間の癖より起るもの

土地のナマリより生ずるもの

此汎意より避けんと欲して生ずる誤り

土地関係の者言葉の終りの〆（ンダンゴの）のふきりと避けて鍋を鍋と鍋と呼ぶ。又無学より春日大明神のカスガとなり鍋糟と鍋者とかき信濃のことあるより品物と信物と書きまる者なり。

人の言癖より生ずる汎意

（二）

青森辺にて母のことをアッパと云ふも此習慣にて大体のことなり。

東京のどぶ（盗賊）大坂の放蕩家。

金沢（ナマリ）を相州にていかばかハ加州にていかチガハ。

鬼州の人にてもの音を言ひ分くる能はざるより犬の川の中に死んでゐると聞きい越后の者のイとエの者をエとイと言ひ分る能はずして井戸を泉と誤るの類。

（人になり）笠をカサマガ急須をキビシヤリと云ひ又間狭間や接続詞や形容形の使方置方に人々より色々の癖あり例へば非常を之を同を無論に使ひソコデリ数百回一時間に用ひふるが如き。

但し大きな大根もしも物とも思ひ高山とも云ふ如きい[illegible]形容と一層強

又重複して言語を用ふるもの例へば歩き紛紛とも御御足（おみあし）とも誤る如し

清誉より起るもの

書き音又似る音を有する言葉も色々に混淆するなり

（三）

清誉より起る汎意

当然と話をかけて云ふれ。水と不見をかけて云ふれるの類

歌の西路より生ずる汎意

京の首

歌の西路より小荒の庭の雪ふりてふり行くものは我身なりけり

○狂歌七夕の題にて

金前に光れかな。かねをかさごの、はしたを銭でもほし合の空

○貧家の雪の題にて

しら雪のふる借家の年つもりはらはで家も煙にねにけり

○歳暮の題にて

とんぼは又さほどそんの内く年をくれることを思ふとろかさ

○向島の春暁の題にて

春もはや今日一日にすみだ川明日は夏にむかふ嶋かな

謎語及び考物より起る汎意

省略より起るもの

符号より起るもの

一体の狂歌

山居して飯むべきものとにごり酒（濁酒）とても浮世にまた身でもふる

蜀山人の狂歌

秋の夜のもきにはらのさびしきは唯ぐらくと虫のねぐまる

（四）考物より起るもの　汎意を生ずるに関係せるもの通常用ふる三段謎法

日本橋と掛けて三国一の富士と解く其心は往来（ゆき）雪（ゆき）が絶えぬ

○又当て物

漢字屋の看板に十三里半とあるは栗（九里）より（四里）旨しの意

海豚、獲尾、鳥戦の四人に寄せて書る情けしの意を寓せ

計幣かつぎは言語の汎意に基くもの　四十九を始終苦十九を重苦と同音なるより此（苦）を忍ぶ（苦）と見み換ふなり

（五）省略より起るもの

東京にて私のことを省略して省略と混ずるの類

（六）符号より起るもの

追加の一

漢語より起るもの

英語より起るもの

米（数高）三三四の数の代りアキナイヌカラブチの九字を用ふるの如し

名称の変化轉用より汎意を生ずること　醤油のことをキシタダと云ふの如し

○動詞形容詞のみを云ひのばしより生ずる汎意

目的の名詞を言に代表して言の類

（七）外国語の混じて起る汎意

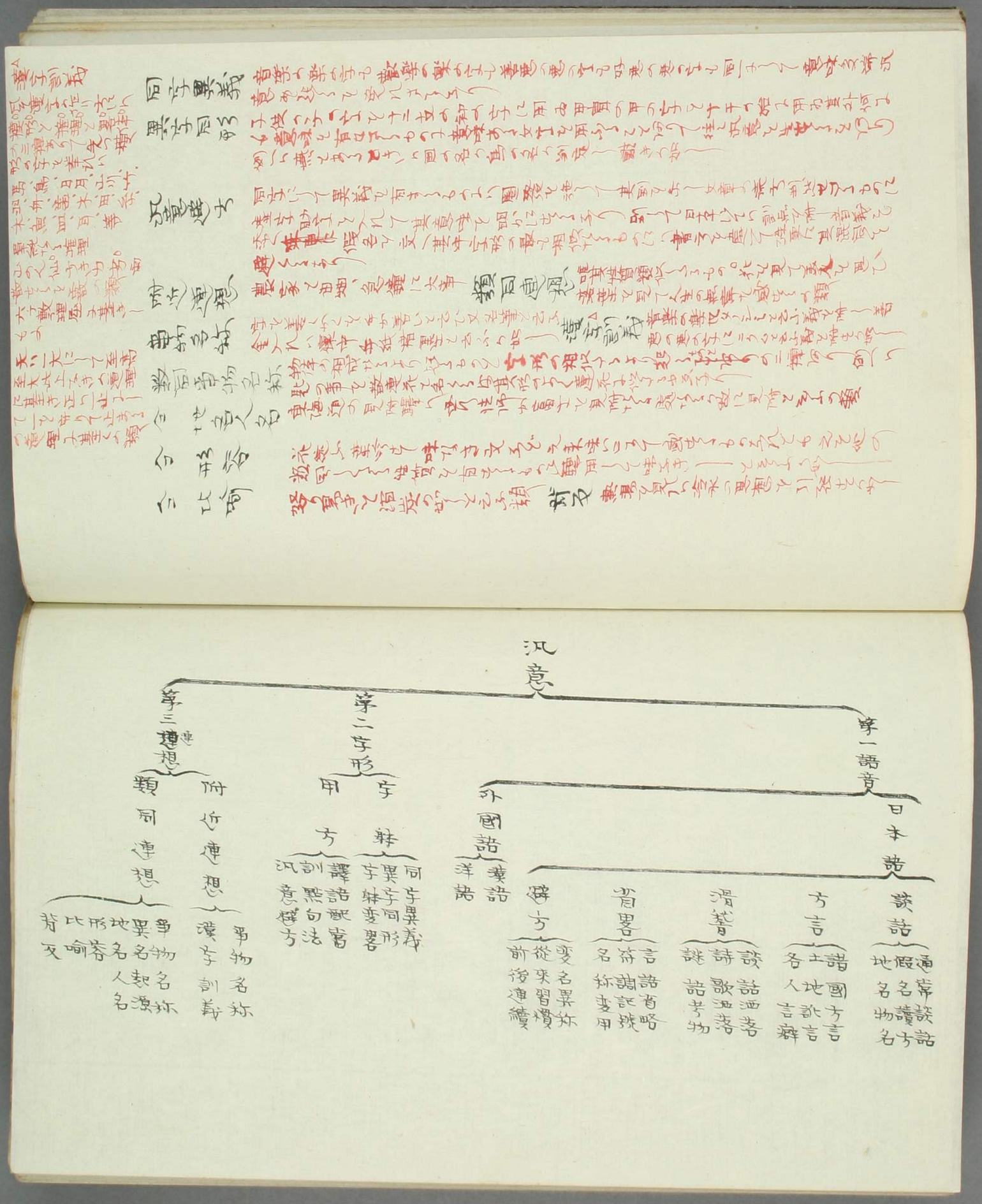
（一）漢語より起るもの

或婦人に彼方い良人かありませかと問ひしに西頭なりませと答ふるよ

（二）洋語より起るもの

ロウ（法律）と字と聞き違ひ大間違起こるなり

○汎意類別表を右に寫しふれい今余の類別に重複なりぬようつて左に其例のこと枝書きしして記憶を供いむ


汎意
第一語音
日本語
談話
通常談話
假名讀方
地名物名
方言
國方言
地訛言
土人言
滑稽
談話洒落
詩歌洒落
謎語考物
習慣
言語首略
符調記號
名稱変用
癖方
変名異称
從來習慣
前後連續
外國語
漢語
洋語
第二字形
字
同字異義
同字異形
異字同形
字体変遷
用方
同訓異語
譯語概説
熟句法
汎意癖方
第三連想
附近連想
事物名称
漢字訓義
類同連想
事物名称
異名類似
地名人名
形容比喩
背反

上田秋成がもとゝ　此時秋成京都に住せ

村田春海

春立かゝるのどけさわきて都のゝらこそのゝらゝ待れ、今ゝ嚴の中なるすまひを振捨給ひて、櫻の花柳よ立まゞらひ給ふらんい、いかゝ心やゝ御すみかならまゝ

すゞもれらたなの蜜いかなれい都の春よこゝろひかれゝ

となん聞えまほゝしき、されと憂世の塵の道れ難かなるも、猫市の中よ隱れゝん、古人の例よ習ひ給ふゝゝれい、世のさがさらぬ人々との み瓜流かゝゝ給ふらんい、山住の徒然はらんよりおゝしはりまゐらゝ ありぬわゞはれさいい雁の翅の行かゝゝて絶すい中々よ遠くて近き類とゝ思ひはくさみ待らん柳の糸の縷かゝゝつゝ、今年もとゞえはく、聞えまゐらせゞやゝ更ふをゝ鶯のはゝな惜み給ひて

矢野龍渓子浮城物語立案の始末大意

第一、小説界の術り兎角の情を穿つのこと止る可き事、將る偉人奇士の爪神態度を字出をもつて表ふべき事、浮城物語は其の目的とする所政治界に在り知らも読者〳〵果〳〵能く偉人奇士の爪神態度を想望せしむるを以てこそ〳〵きや否や

第二、文体粗密の点に於て、我が今日の文学界は粗密繁簡の中を得るもの果〳〵読者の飽かしめざるのわけなりや否や、又浮城物語は果〳〵〳〵読者を飽かしめざるのわけなりや否、又果〳〵〳〵浮城物語は繁簡の中を得たりとせふ〳〵きや否や、

第三、恋心をもつて淫思と情さしめ之を為して不善の境に陥るの恐れいなきや否や、

第四、読者に娯楽を与へると共に其の目的面に収め得らるべきや否や、

第五、毋物い豪宕拓淡と滑稽笑謔を主とし〜哀怨窮愁の情を
思ふ一切之を排(さる)を目的とするしが、果して其の目的を達せらるるとはな
きや、文書中の人物い喜怒哀楽俗語情の人を主とし偉丈幾個の奇
士を畫き出し〜之を相照映せしむる積りなりしか、果して其の目的成
らざる憾なきや

第六、読者諸賢願はくは全部を通読せしめんとて密なかきしと思ふ文
字を引用きたくかきしと思ふ事柄を略せり乞ふ

第七、小説愛読者の種類を考ふるに此類の書い損益きに似たり其損
益を比較せば他の一切の新説者を情〜損益相償ひ得
きやを、

同氏の繪畫論　附日本油繪評

第一　美麗なるか故に之を好む水墨畫も此部内に等しく心を〜る着色

畫のみに限らず

第二　美に似るか故に之を愛す一橋花卉の繪畫を掛け並れい四所斯之を
百花を室内に眺むるを得畫中の美物(オモノ)如し故に之を愛する所い模真に
相似るを模真美とする

第三　繪畫に於てのみ觀ることを得(ル)事物を実に故に之を好む者如く
ハ字オートルロー戰花馬山水世界に遍く奇を探の幽を索むるも決〜
宣物の現得いかるべき嶮岩峰峯の小渓の画を描きたらかを之を奇態
ハ美と名づく

第四　美麗にあらざれ模真にあらざれ奇態にあるべし三者の外に抜ける一種の
旨味を変ずる者見れく筆一張之を約言せん「斯く有て見れよか」
と思ふ所に新〜事物の能を描出せしものなり
第一の畫を愛する者は模真の畫を好む者にあらざれいく中こゝ今〜第三

愛と云ふ者に至てハ看畫にあらされハ得心せぬ愛情者くヌ）種の
自然ものか如に之をかむとおもふ者に全くハ殊に演畫の二等なるものいはんなれ
ハ得心せぬ才四の愛歌者ハ畫を見ふに心情をいふとさらに故に其如をとふ所亦甚
さ亡ものしく（手術）前述せる美麗、優美、奇態、旨味の中にて前二者ハ手術に屬し後三者ハ（意匠）
意匠に屬す

戯曲論　忍月

△戯曲の定義を下に曰く

戯曲ハ概往に於ける人間の行為（我行為をも含包して）を現存とし之を
曲中人物の言語に頼りて美術的に発揮せる者なり

アリストテレス曰く「悲哀劇曲ハ長懼と哀憐とを惹起せしめ、以て凡俗汚
情を洗ひ去りて石文夫潔なりむる者」ふりと、見れ相接に人情をとび
間接に道徳上の感動を言ふに過きて、之をドラマの目的と云ふ、或ハ不可なか
ふ〜〜〜〜〜

（叙事詩）
（日く叙事詩）
詩体に三種あり、曰く嘉情詩、曰く戯曲（ドラマ）是なり
叙事詩ハ世界万物及び歴史上の生活を客観的に叙記するものなり
嘉情詩ハ作家自身の意思感情を主観的に直叙せるものなり、故に叙事詩
の性質ハ過去の事実にして、詩中の人物ハ人称なり、嘉情詩の性質ハ現
在の事実にして、詩中の人物ハ一人称なり、故に彼ハ傳記体（物語体）にして、
此ハ自家の別白なり、而して戯曲ハ実に此二者の中間に位し、客観的の材料
を主観的の材料とせるものなり、之を別言すれハ、叙事詩の材料と嘉情詩の
叙述法との結合に由り、別に第三種の詩体を組織せるものなり、是に於てす
吾人ハ△

○レーノルド氏美術講義より抜粋

天才の解

(上略) 普通の解釈によれば天才とは美術規則の外に存する一種の神力即法則とは教ぶべからざる動効を生じて得べからざる一種の力を指さして天才の成す製作品に見出だす美を享(の得て)ます所あるごとき所以なり所此説によれば天才とは初より一定不変の動きべからざる者のやうに改定され居れども実は天才と称する神力の度を思ふ所にまちまちに異なりて其然る所以は人間の之に対して懷く所の考ふ時々に変化せざるべからざる美術の如き恒久の事物の模倣に画き得ざるべからざる事物の模倣に画き得ざるべからざる者と異なれば又今日に於て美術の原理と知らざる者と雖ども言葉を吐き脱たる或一定の法則発見せられて直ちに大切に守り行ふ今迄推しと異なる事柄迄も見事に成就し得べきことなりとは天才の名を設に其意味と変じて今迄より高尚なる一種独得の創才技倆感覚等と異なる人多く見ることなれども其高尚なる美術の才を其当時に知られざる如何なる類例とはなるべきや教ぶべからざるものを示す

形体に　を見出だす、内部の心情を現出せざる能はざる事柄に加へて画等の繪画をなすが極て類例として教へ得べからざるは現今状態なれば顧みず此等の力を古代ギリシヤ人は偏に天才の結果と考へられ天才とは決して教へ得べからざるものとなし得べきものなり経験と経験より得べきものなり結果と言はざるべからず寧ろ精密なる規模なれば才に美術の経験と積み其経験を能く消化して以て自家の応用とし天理と造化とを一致に斯く境を進むるまでは始て斯く言ふべきなり

傷感の為に一足飛に斯く境を進むるまでは始て斯く言ふべきなり

ことを述べ者(自分より偶然のやうに思はれてこれを初の為に如何なる

類型類則的に一定の目標を定めて進むべきを知らず偶然の
唯熟々にこれを進めて漸次に目的の道を図り其内に又他の人を生ずるに一層其道
を開拓し次々に此の如くして遂に其人数を発見られ其技を展ず実行ら
れこれを常に幸ぐ幸に際に将来如何ばかりの原理法則が確定延期されこれ知
らざる美術と目的とを見ると常に相違せず此の術の進歩たるや美術益々
進歩し其規則を定め多く確定するに至るべし
然るに此の術が如何にもこれを進歩せしめ創造発見を所と為す智力的
活力と実践的文法則が軍国的に既成されるべきは判然たるも天才と常に
交られ一定の組織と又常に狭隘なる知識と機械的成功とより一定の範疇
と成つ来たと明らか
カラ人が自天才を発揮する能の如何なる所の初めたるを云ふ、深遠なる規則
が終に始まりまして普通[illegible]規則が終る其に上始

まる度合を天才と云ふ如何に天才の製作なりとも其原因を立て確
然たる一定の類律なんぞあるべき何ぞ必ず既に偶然の
性質と具へる者まるまるして誠に異常なる才能を有する人即天才を具
へる人間が成て働く所の規律法則より出る性質を具ふるべきものと其
類律法則を天才の人間が特殊の頂点を通じて其中より発見せらるるなり美
術家の常として其観念を明に他人に伝ずして能はざるを得ざる手に彫れ
言に見はす術なくして他人は如何ともなし難き
此の如く其類律法則を無象的なるして明に之を他に伝ふる能はず
然るに美術家自身の心に於ては明瞭に見られ感ぜられて確と紙面に沿ふれ
ども同様に瞭然として所なるべし

大学紙背聖学問答より

聖人の道

凡聖人の道とは、人の心底の善悪を論ずるコト、洗ヒテ無キ事ナリ、聖人の教ハ、外ヨリ入ル術ナリ、事ヲ行フニ先王の礼ヲ守リ、事ニ處スルニ先王の義ヲ用ヒ、外面ニ君子の容儀ヲ具タル者ヲ、君子トス、其人の内心ハ如何ニト問ハス、云々

聖人の教

聖人の教ハ、外ヨリ内ニ入テ、純熟スレハ表裏一致ニナルヲ、成就トス、是ヲ成德トイフ、德ハ得ナリ、身ニ行ヒ得タルヲ德トイフ、シカルニ御歌道義ニ見エタリ、云々

釋教

釋氏ハ内ヲ主トスル故ニ、外面ニ非ヲナサヾレドモ、内心ニ不善アレハ是ヲ無明、煩悩、妄想ナド、名ツケテ、罪トスルヿ、サレハ釋氏の教ヲ内教トイヒ、儒教ヲ外教トイフハ、后世の名目ナレトモ、当レル名ナリ

羅西亜

ベリンスキーの文学の定義

ベリンスキーなどヘーゲル派の人なる如く其時代の「ゼストアイデヤ」現れたるを美術と云ふる如く

又一国民の発達さらに三階級あり而して三階級の叢を言、書、文、の三期に現ふるといへり（浦島太郎物語などの如くまたかさるを言ともふ）

ベリンスキー文学に定義を下して曰く、総て一国民の理想の発達は常に詞文の上に現れさるを得さるものなり而して其発達の因果の充分に文章の上に現れさるもの之を文学と云ふ蓋し理想は国民生活の最高現象にさきれば其社會に存在せる限りつねに誰れか之を了會せさらん所謂文学の廣く人心に感觸し廣く人心を喜ばしめ廣く人の為に了解せらるゝ、ゆゑなり

又曰く詩想ある著作は文学と雖辯の如きも（其目的の実際世界に関せるもの又は学問的のものにても）修辞的に言ひ現ふさる、限りは美術と文学と

又曰く文学の歴史といふ〜即ち当時の世態の関係と因果とを明らかにして然るに所謂言ふ唯来歴を有せるのみ有の径を示すに過ぎず即ち其の事柄いさゝか其時代の何年其紙の原きの薄きの其字の大小なるを示すに止る文学の在所の社會と言の在所の庵室書齋山林又々原野と変ずるにゴリンスキーの解釋せるごとく自れの文の科学的にして言い偶然文い普闡的にして言い特殊的文の社會的にして言い一個的なるが如し

＊言ふ心ゝ当時の社會の理想を現し居るならんとく

（以下　坪内講師の解釋）

文学とゝ普通の知識と感情とを以て面白く感ぜしめやすく作者の思想を言ひ現いとる文章の總名なり但し普通の知識と感情とに喜ばしめんとせば勢遂に感情に訴へざるを得ざるが故に文章の言ひ現いしかまい思想を分析解剖して死物のやうに示すにあらずして統一總合して生けるが如くに示すものと知る〜〜

文学の目的の定りなし何ぞなれば人間の目的世と共に移り移るが故に人間の為なる文学の目的も又隨て移らざるを得ず昔人間が首目の動物なり頃には文学も又首目なりき人間偏眼の頃なり頃には文学も亦偏眼にてをさ〜快楽を目的とせり今や人間の両眼漸〜開き其運命の帰着せる所を知らんとせば文学も亦全〜方角に向ふて進むものなるやを必せり

既に文学の目的の定れらざる上は文学に階級の生きるゝ止を得ざる自然の勢ひ即ち前代の文学前代の文学など云ふ名称をこゝ〜〜但し先代の文学は文学に非ずと云ふ者あらば神武天皇時代の人間は人に非ずとおぶに拍〜と答ふ〜〜

今圖にて解明らさむ

野蛮（口授を筆記とる）人の心に明男即ち現在あつて生男即ち過去未来なしされど人の京繩終極はなを想ひ見たにせさい勿論なれど此時代に一の音目とし（こもの）あり此音念美術的に現れるものを野蛮の美術といふ——之を今日の思想より見れば美術の如く思はれされども之を美術にあらずといふ所野蛮人をもて人間にあらずとあふに均——

（未来にも過去にも考はれる時思ひ知る）

野蛮人漸く発達進化せるに隨ひ信仰成立つに至り尚進むに隨ひ常識（コモンセンス）出来れり然れども常識ら未来と解く能はず而して猶ほ未来を知り神あるを覺えるの唯独り信仰ありけれども

此の時代に育念ら信仰（フェース）、コンモンセンス（常識）、スーパスション（迷信）美術的に現ぶれり皆美術と云ふを得べ——

上古日本ハ文字なくて。今ヨ用来これ。両三字ばかり。いにの頃よりか。漢字をもまぜて。本朝ハ文字なくて。さて果てさろうべもなし。もと假名字といふは。萬葉書の巻みしるし。訓と声とを交へ用ゐ。ハ以呂波文字れるきは以前。男女尊卑。こゝをもして文字の用を達せり。源頼朝。弟義経のかふ付て。声と訓とのまぎらはしきら故なり。ちくふり。吉備公ハ製作そしる。アイウエヨワ五音相通の文字とせ。大和假名とは此事より。又いろは文字なる。世ヨ弘法ハ作とのいふるも。一決まこのそしる。一説ヨ

以呂波仁保へと土。知利奴留遠。

以上十二字護命ハ作

和加ヲ太礼曽。門祢奈良牟。宇為ノ於久世末。計不

已衣天。安左幾由女美之恵比毛せす

以上三十五字を弘法の作

京ろ一字を傳教ろ作也。いろはもと四十七字なり。傳教は一字を加へ。四郎遠境の男女作。王土ろ字はさらすべきにさしまして。一こをふり。千ろ億ろ数字は。聖徳太子のかぞへ方をこゝに添ふりといふ。又ろ空海。勤操。傳教の三師。共了造ともいふ。又景良ろ纂疏ろい。四十七字ろ天地自然の声。彼蔵声と假ろ。和字とふて。とうや。さをがいろはを国字といひて。天竺震旦にろ和字といひがふ。是ろ八ろく遠字ろ。草書のすがたなるとや。女の作也。もろ短字のたはろ。あまろ。来世ろ。習ふをゝ。是ぞ和字ろ。ちろ地方式は中ろ字也。とりあやまり。出ぬやまろ也。まゝ一のろ。ノ乃ノ。みゝて。ためゝて。

なるゝ。こゝ。ノとえの分ろて。さといふろ。ちゝみえといふろ。といなり。止の字ろあらぬ。すゝていろはを訓をとらぬ。皆声を用るよりゝ。正ゝ。番明なり。ノ乃字ろ。ノ乃字と心得て。祖師傳。むろ年也。世ろ歩武とおもふろ。点をろ川ろふゝ。点ろ。まふゝ歩武ろなるゝ。點ろムの掛ろ点なり。れの字はおゝ。れ字ろして。未篇ろ作ろ非也。又をの字は遠の字ろり。はをは口ろを異のれとふ。れは衣の字ろて。ちゝみえといふろ。兄の字ろ遠也。これ横諸又の又なり。上代のいろは文字と。中頃今様の字なりは。それぞれちがへる。次ろあやまりもて切て。ゝろ切ぬれろなり異なり。ろのかゝ。添れ清ぎ。ゝ頃ろさ。をやとりやまれとて。堅式ろも。これを歌きゝと。当世野郎傾城の書ちらゝる字形ろ。正字ろ体もなゝ。以后次ろろゝ人もなゝろ異。いろはろ字形ろ。なれもも

はかりうゝ。京極黄門宮ばかりうふばっひとて。定めおられしより。歌道の傳授物うて。是とあらざるを以も。無下の事なるべし。されど大和言葉を用ゐる假名字ばかり。ありふゝ字ばかりなり。上古のうきふをうて知べし。これ天竺の陀羅尼字の類なるべし。假名遣ひ通ら。和語のとのいうるべき事なりて。さおゝ吾邦語の上よりて。ゆゝ。時々今味せもむいつゝかるべし。きびかれさのきびひよい。けれども此の正字と。きでゝしおばのうと。オとをべき事なり。文字みゝゝしきと訳こゝなさゝ。文字とをあいまりて。古篆乃篆書よ。きづふとのおはゝ。異いをいなり。行ちをより生る。草わ古篆より生ゝ。まいゝく行をいいもをなうて。草をお藤しから人とおもゝ。篆字ことゝいいて。を法とをてゝしてをるべゝ。ふれば。和訳さいろは文字。もゝ。此正字ばもて。きゝうをもて。そを

ひ異朝よりうゝのとき。文字乃正字をすゝいうに。異国人もよみあうゝ。と。九芝亭の主人。笑氏汝村。正俗文選。うれづうひを主ゝきもるよ。これを跋也。嘗室永三戊戌春三月

望

閉関説

芭蕉翁

色も君子のよくむ所まして。佛も五戒のそび免てをそれ、
ども。さすがに捨がたき情のあやまるべし。おいれなるらんぐもおは
つる八一。人忘れぬくらゐ山の梅ト吟ゝ。おもひの外の
句よ志して。忍ぶれ周の山めれ関も。ほ人はくいらぬるあや
ま化をら仕出てむ。あまの子れ波の枕よ袖ふはもて。家をうを
身とらしなふ為めしもおはれど。老の身の行末をむさぶを。
米銭の中よ魂をくるしめて。物の情をときまゝざるよ。遂よ
まして罪ゆるしぬべく。人生七十を稀ふりとして。身れ盛なる事
ハ。ようやく二十余まを。そびめの老れ来れる事。一夜の夢れ也。
五十年六十年れよそひっふくより。あさまーらんぼをもて。寄寝

ぶちう朝起さしぬ。ね覚に分別ふに事をうむさふる。おろかふる者い思ふ事おかし。煩悩惜たして。一藝すぐるゝられる。是非乃勝るもの也。是をもて世せいとなみあて、貪欲此慶更に心を怒し。瀉血よおぼえもう。生うす事あいにぐと。南華老仙乃唯利害を破却し。老若をもて。閑をふらむ。其の業といふごとれ。人来れい無用の兵あり。ぶくい他の家業とさまふぐるもう。学敬が庵を閉て。杜五郎が門を敲さむるハ。友ふきを友とし。貪を富として。五十年の頑夫。自書。

こゞろ乃月や昼ゝ敲おろかの門の垣

座右銘

人世短を云ふ事ハ為ぞ
己が長成とくるふ ふら也

銘ようさう

もろいしば
くち花ハ
ちむし
あよ
乃うの孰力

芦蕉

是非斉、銘

是を是とすれば是。誠つるかちつ。許六

非を非とすれば非。誇るよせつ。

（下畧）

風俗文選巻之一

五老井　許六選

辭類

柴門辭　芭蕉翁

送婦許六之故郷餞別之文也

去年の秋。うり初る面をあいて。こゝ〳〵五月のそらめ。深切より別をおしむ。其ゝ程なくてみちく。びとゝび草扉を出いて。終日閑談となる。其器。繪を好む。瓜雅を愛す。平てころえ[illegible]とふ事あ[illegible]。繪ハ何ハ為好むや。瓜雅の為好むといふ。瓜雅ハ何の為愛をや。画の為愛ゝとい[illegible]。其まゝ[illegible]ぶ事[illegible]て。用をなさぬ事なれ[illegible]。まゝとや。君子ハ多能を恥とい[illegible]。そゝ。品二ま[illegible]て。用[illegible]ぬ事。感ぜ[illegible]ばかりや。画いとりて[illegible]ハ師〳〵。瓜雅いと〳〵[illegible]て[illegible]ハ子とな[illegible]。されども師

が画は精神徹に入る。筆端妙をふるふ。其幽遠なる処。予が見る所に
あらず。予が風雅は。夏炉冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。
たゞ釈阿。西行のことばのみ。かりそめにいひちらされし。あだなるたはふ
れごとも。あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも。
これらは歌に実ありて。しかも悲しびをそふると。のたまひ侍るを
しとかや。されば此御ことばを力として。其細き一すぢをたどりうしなふ
事なかれ。猶古人の跡をもとめず。古人の求めたる所をもとめよと。
南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて。
燈をかゝげて。柴門の外に送りてわかるゝのみ。

瓢辞

男鹿なく。此山里を訪ひきたる。嵯峨野の才は意を学ぶ人あるまじ。ま
づつり瓦大治もまぬかれず。とり美み系図咄に。甲州の釼も。今ち
菜刀一丁の刃帯まで。あまりけびしさに。垣に瓢箪を植て。祈ふ
しの筆法すなや。中々もおもしの物の書付侍る。
「甲斐もなく果なる物くづし。世に名子とり見え侍れど。
才ち雲水の便なき。浪人ひがごとぞおぼゆる。かの器は学び者の
とあつまれ。此甲のよくはに。ぞざと返しといふて
「かまきり」に降参しける物くづしとぞ笑ひける。あゝしき、
つけて。随喜にあけて瓢あてみしひち。覚人の工。里の子は来るま
じ。草刈の中より。其賢人くらぶならず。

支那戯曲の沿革

（三十四年三月十六日　報知新聞）

明治三十四年三月十四日夜の文学會に於て森槻南氏は支那戯曲一班なる題を以て左の演說をふせり

支那演劇の起原は元に在り故に一に之を元曲と名く此より先き唐の世に当て李園の教あり玄宗の朝李延年等之を以て著る然れども此れ一人手踊に過ぎず現時の劇の如く忠孝節烈の事蹟を演ずるものに非ず之を演ずるに元に始まる而して其淵源は実に起れり宋の末小說流行せ著名なる三國志水滸傳の如き実に此時に出つい說ふるものは言辭平易よりて婦女童蒙も解し易く人を感ぜしむ若し之を音律に合せ節面白く咏じたらんにい尚ほ一層の感興ふらんとて是に於て絃唱小說なるものを起る即ち小說を管絃に合せて歌ふものにして尚ほ我國の聚文斎れ節の如きものとす

絃唱小說の始めい世祖說

を琵琶に合して歌ひ終りより終て唯之を唱ふのみにて興趣
宜しく優人をして之に拾せしめ舞台に登て其事蹟を演ぜしむ
此に市井鄙俚の歌謡よりては不可はれい音律以て之に合はせ
しと終に音律を以て其劇を幣くことはれり元は素と世子に興る
而して其故國の曲を用ふ故に之を北曲と云ふ
北曲は漢宮秋を以て嚆矢とす即ち王昭君胡に嫁せしことを脚色して
こもの之を演劇の濫觴とふも后之に倣ふ諸曲起る北曲を之を四
劇に合つ他に發端一劇あり是れ所謂序幕にして之を以て全曲の脚色
一般を知らしむ当時競ふて其曲を作る且つ元朝士を試るに作曲の
科目を置く故に進士及第を望むもの皆競ふて曲を作る元の時代
僅に百年に充たざるも曲の数殆んど二百種に越す
北曲の単に之を四劇と唱ふるは往々面白きものを其中に綴り忘る能

はざる感ありを以て王実甫西廂記を脚色して十六劇の曲を作る当
時の演劇皆北曲に止まる南方の人南律を以て之を作らんとして終に南
曲なるものを起る又来北曲おの一劇に一の主人公の外歌謡を能はざ然るに
南曲之に異なり其劇に出づるものは皆歌謡するを得ることなり北曲の始
めは琵琶記に起る其他龍泉園殺狗記等著名のものなり今此に琵琶
記の脚色を述べんに漢に蔡仲朗ふものあり一婦を娶り后六十日を経試
験に応ぜんため都に上る当時の宰相某才学を愛し之を女婿となさ
んと欲す百方説誘して意に之を駙馬となさ而して前の婦は空閨
を守る数年其間に歳饑洪水あり家計大に窮す婦独り特据経営
千辛万苦を嘗め克く舅姑に事へ夫の音信を俟つ而して音信遂に
到らず舅姑又歿す因て婦を送りて琵琶を弾じて都に上り其
夫を尋ぬる曲を悲切婦哀人をして聞いて嗚咽せしむ曲言集琴

著いを所の南柯夢の夫い富貴の家の婿となり婦い困頓流離するの
卿色い盡し此琵琶記より穿れるはらん明太祖極めて此琵琶記を賞
賛して曰く五載の人家に処くべからずこれ均しく琵琶記い富貴の家に
ふらべからずと其他牡丹亭の還魂記の如き紫釵記邯鄲記の加
き其に人の嘆賞する所な
清朝に至り李笠翁も名あり其十種曲の如き皆音律に合ひ且
つ其曲文の口調甚た佳きをもて優人の間に尤も高評を博す然れとも
学者い鄙猥にして讀むに堪へすとふ多くこれを学らす其文章い
李翁の如く人情世態に近からさるも而も能く慷慨悲壮の能を寫
し尤も士大夫間に珍賞さる浅本い長生殿及紅雪樓の九曲等と
も邯鄲文天祥の履歴を叙し若くは侠客の事蹟を綴りたるもの
なり

支那現時の演劇の体裁い俳優い単に身振に止まらす自己の見ふ
所を口に出して歌ふものにして我国の能の如く優人自らこれを謡ひ側に
あるものい間かさるもの、如くせ而して其一齣だけい必ず黄鐘若くい正
宮等の一律を以て終ることを常とす又俳優にい生旦淨丑末の五あり
生といい男の主人公にして旦といい女子の主人公なり淨い敵役にして丑い
道化役なり末い即ち口上言(いい)なり何故に生旦淨丑末と名くるかと問ふ
に演劇い總て真偽を顛倒し他を假りて此を顕はすものにして總て
反對なるものなり彼の男の主人公の如何い其事物に熟せる故に其熟の反
對を取て生と名くなり即ち陰にして晝夜よりもなり即ち夜なり夜の
反對い即ち旦なり故に之を旦と名く敵役い極めて醜怪なるものなり故
に其醜の反對を取て淨と名く丑い前の理と相反して醜丑(うし)音相通
まるをもて道化役を丑と名く口上言い事の始めに於てふるまいの意故

に其反對を取て末と名づけ今や此五段を以て演劇の骨子となせり

佛教と理学

摘要　傳燈十三
井上圓了

理学者ハ佛教中ニ須彌説あるを聞て全く佛教書ハ古代の妄説ニして非ス佛教ハ全く理学の原理に由りて組織せられたるものゝ只理学と異なるのみ応用せらるゝ所の範囲合わざるに依る例へハ佛教中にハ客観論主観論理想論の三大部ありて其中理想部ハ主として客観をもとゝ然るに理学ハ客観一方の論なる故に佛教と理学とハ其原理を全くもつて理学と之と客観一方に用ひ佛教ハ之と客観主観理想の三論の上に用ふる別あり又理学の客観論ハ佛教の客観と比するに理学ハ客観の範囲外に出ざるものとして客観現象を根據として説き佛教ハ客観の裏面に理想を立つるとして客観境を辱性として説く別あり換言せハ同一客観現象上にありて理学ハ有形的物質をもとゝし佛教ハ無形的勢力をもとゝする別あり

佛教と理学とハ其俱合論ハ此論によるの時ハ萬象を分ちて七十五種とせ

此論法を概括せて

有為法 ― 変化する者に名つく ― 心性と

無為法 ― 変化せざる者に名つく ― 色法 心法 の四類とす

色法 ― 物質の事にして（赤青等の顕色と感覚に抵触する物質と此物質の細微な消滑化学的元素と）

色心二種を共に変化と有する者を総て有為法に属す

俱舎論に衆微聚集変礙義、成と曰へり此の如く集合より成り物質即ち

色蘊に

五根（五根とは眼、耳、鼻、舌、身、にして五種）

五境（五境とは五官の感覚に対して色境（顕色（青黄赤白））形色（長短方円高下））

以上諸色法を解して四大種所造と云へり四大種とは地水火風なり物質

とは実質を義とせるに非ず消物質と構成性質とを拠物質を此四種より成る

俱舎論曰へり

地界能持 水界能摂 火界能熟 風界能長

又曰へり

地界 堅性 ― 湿性 ― 煖性 ― 動性

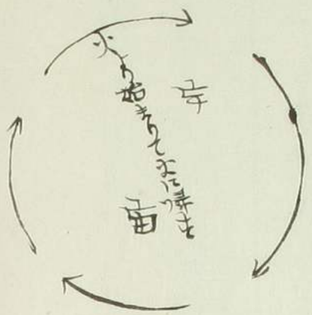
即ち地水火風は堅性湿り暖り動りとを具ふ凡物質は必ず此四性を具備して

異性減ぜれば物質亦滅ぶべし故に物質は四大作性と云ふ之を大と名つくるは此四性

廣くこの物に渉りて為す其作用大なるに由る

凡そ我眼前に在る物を物質と呼ぶ引て変化して止まざる色法心法皆然り

味 ― 嚐 ― 見

と有為法に属生有為と生滅変化あるを称して其変化の状態を無常と云ひ
無常の事情を四段に分ち生住壊滅（或ハ成住壊空と云ふも其和合〜）の四相
を俱舎論に曰く
能造名生　能安名住　能衰名異　能壊名滅
此四相を循環して際涯なく俱に曰く
空中漸有微細風生見者世間得成前相


宇宙流転符合せり

生住に相応進化異滅に相応退化く此進退に化循環して際限なく終に天地物
の一期に関係する（形象上の変化あるのみにて其質体は不生不滅不増不減
（物質不滅説の理法と合一く）
世界の開闢人　無始無終（創造論に造物主を説かず）
有始有終（上に反して）
其進退開闔して際限なきは因果相続相関の理法あるに由る
又大果報信論に
虚空無辺故　世界無辺〜〜　衆生無辺
今日の天文学に此説合〜〜之を要するに仏教にても時間を無限に空間を
無涯に其中に無量の国土あり無数の生類ありて事物の此事物変化して一時
一刻も休止せざるなり此変化を時間の上に生ずるを未来、現在の三段とす〜
其間に貫通する規則を因果の理法とす

理学にても　物質あれい勢力ありとし勢力あれいも物質ありとす勢力を無
形く佛教にても勢力の本源を論して理想即ち真如の本体より発生せるものとなす
蓋し真如の勢力に生滅変化の習慣性を有せるものと、有せざるものとあり斯
人の有せざる文の勢力を此習慣性を有せるものとして一応此身体と解散すれども其数
世間の習慣と一世間の経験と相合して一種の業傳性となし此の性力に従て更
に他の身体と結成せしに至る此理に基たて佛教にも六道輪廻説を立つるこ
然るに輪廻説に佛教中の一部分の説として全佛教一貫の説に非ず又佛教に客観論
と説くも一部分の説のみ抑も佛教に客観論
もあれい客観論も理想の一部分一現象なるにすぎず又客観の境遇に我
現の事情に従て種々に変化し種々に現出せるものと換言まれい外界の境遇に我
部分既想にもとて変現せしめるに佛教に唯識所変の説出でし学者の理学の
存理にまた四に限らざるべし

○精進

なを始中終無断に善法を修行する心掛を精進
とし善法を修行し一念も懈怠に間雑
れなく

○一休和尚の母公の遺文

我こ沙婆の像つま無為の都におもむく肉身を化生家に成り玉ひ仏
性の見をみがき其まゝ法こより我ら地獄に堕ちる不断苦ふるりは
ざること見玉ふべし　釋迦世尊歴劫苦行故とふ玉ふ程の人に成信心ふ
俗にても不苦ふ　佛四十余年説法玉ひいて一字不説とのたまへり上
は我と見我さとゝがかんよふにふ何事も妄念想あふかこと

不生不死身

九月上旬

千菊丸ゝ（一休和尚の幼名）
かゝるくもち便のせつとのみ寄る人ゝこゝろ也と同じ事に成八万の諸聖教と
よみても佛性の見をみがゝざんは此文ほどの事も解かゝる

是とても かりのあらぬ別れては
かさみぐも見よみぢぐこの跡のあと

右二休和尚の四ツ目期に休和尚こおくり給ふ文の写として学丹翁
の持傳に居れけるとぞ

文久三年癸亥の冬

南山主誌　日乾大宣
寺門塔

○いろは歌の意義

いろはの歌を弘法大師涅槃経に所説諸行無常偈の四句の
略なりとも聞きて見れば、諸の法無我偈の四句の略なりとも聞きて
は無我偈とも聞きて云へり。曾て偈を和訳せるものく此前まるを因行を明し后半分を
證悟と明せり。一切仏教廣しと雖も此因行と證悟とを明せる外なし。つまり色と白
と散りぬるを（此は因行を明せる中我心の像を境界を明せる）を即ち我心の外
なく山川草木等一切の有形物みな我身の無常なるを謂へり。色とは有形物の総

称にて（仏教にては有形物を総て色法と云ふ）句とは佛法に云ふ生住異滅の四相の
生住に当り散るは異滅の二に当る。例へば櫻の色艶も雨風に散り失せる
が如く、此四句の偈に配せば諸行無常に当る

「我世誰か常ならむ」

此句は能縁の智即ち無形の心の無常なるを云ふ。但し此句と次上の句と色
心に分別せるは一往の分別にして実には互に通ずる所あり。上は前に約し此の句
は法に約せり。我とは主宰又は自性の義なり。此我にこれあり、人我即我身を我者
と思ひて種々の煩悩を起せる所を指して声聞縁覚の二乗の云へる断滅なり。二に法我
即一切の法は実体ありて敬ふべき煩悩なりと雖も此二乗と断滅せる外は
なれば此は一乗の教法に規定せり。世とは世界を世界なる者と
云ふ。誰か常ならむとは無常の義なりと云へり。四句の偈に配せば是れ滅法に当る

「有為の奥山今日越て

是れ下半分は證性を明す其中初に漸悪とて即ち果を得んと思ふて煩悩を漸々滅ずるを明す有為の根本無明と生住異滅の五相を有為とゝふ法向をして言ふもに峻嶮の山路に樹木茂くとして猛獣毒蛇又其中に住まり加くこと毒人毒樹涅槃の岸を覆ひ五欲の猛獣菩提の果を隔つ故に果心とゝふ然るに前の人法二執を断ち火の三昧の智慧をもて三毒の木を切り五欲の猛獣を殺して此無明四相の有為の峻嶮を超て菩提涅槃の平道に入ることを合掌して とゝふ生滅ヒに尊〻

涉生死海夢不覺

此句は證果を明す句なり漸悪に依て證果を得ん故に夢とゝふ法にしたがひて涉生死海を涅槃の彼岸より涉るとゝふ夢なり

法執煩悩をゝふ解を無明煩悩をゝふ謂〻妄執の夢を見て無明の酒にも酔ひて此二を離るゝ故に菩提涅槃の二轉の妙果を證得せざる故滅の楽に

に尊〻之を因由の概略として製作の時代を確なりねと云ふ有 歟年の前即大同四年秋空海(弘)法師真如親王とあり後信をぎく

○沙門

沙門とは梵語なり此には勤息と翻す謂く戒定慧の三学を勤行して諸悪を息む〻故に出家者の通稱なり

近松門左衛門の不傳

近松は美濃に生る（今より二百三十六年前）其生地に付ては種々の說あり
て一定せず或は越前なりと云ひ或は出雲國近松村なりと云ひ或は江國高
觀音寺の僧なりしとも云へり

蜀山人看生せし淨瑠璃譜（作者分らず）に近松は高觀音寺
即坊の僧なりしが出家を嫌ひ京へ出て宣旨しふりし由記せり
されど普通の說は長州萩の家來杉森某の子なりと云へり此說当を得
たるに近し何とはれい其の杉森信盛と名のりしを見ても又辭世の句よ
甲冑の家に生れ去る」とあるを見ても之なるべしとはれいへ

（參考）　近松門左衛門遺蹟　二十三年十一月十一日改德新聞より抜抄
但し筆村先生の考ふる所にあらず

本紙よりも曾て記載せしことありしが山口縣山口南場殿小路松村虎
吉氏は近松の末裔なる由にて頃者系圖一卷を發見せりこれに依

れい門左衛門い松村八兵衛の三子にして幼名を藤四郎といい
出て、戯作に従事し姓名を近松門左衛門と改め、世話浄
瑠璃に同じ唯これに依て合せて墳墓の所在を知る　　同町
禪宗妙泉寺内にありて妙法院宮の法諡及び正
徳二年壬辰天四月十九日と刻したる一石碑にして寺内北隅に在
り右松竹及び有志の人々追慕の餘り義捐金を募て遺
跡修繕に尽力中の由同地の新聞に見る

饗庭篁村先生講演筆記

近松門左衛門の傳

近松以前の芝居及び院本

近松門左衛門（明治二十三年より二百三十七年前某應二年生る）を演劇編作
者の鼻祖の如く思ふ者あれど然らず近松以前既に歌舞伎狂言の社經あり
て其御本粗ぼれと通りい備いり居りしも左に其景況を述べ人とも
芝居の変遷　　應長八年頃に出國（聖州松江の者なり）と呼ふ女あり
二三の白拍子と謀り初めて歌舞伎女舞（出國歌舞伎といふことなるものを興行
せり小袖塗笠の扮装にて笛と鼓とに合せ踊りかたちはかろ〳〵として大に世
に持囃されいり此頃名古屋三十郎（此名確りふりにことといふ者あり出國と俱に力
を斯道に用い屢〻脚色をも作り〳〵とふ人或いは二人を大婦ふりと云ふ
確りふりに変じて又さど嶋正吉と呼ふあり江戸に来りてもっぱら此の藝を演じ大

に翻人の唱哥を博せりさハと云来此等の輩浮薄の事の至に芸道留なき人にて
さに陳し嬉徳修らに醜聞惠く風俗を乱せしを亦盛ふ〳〵かゞ公義より達いせ
られしるが如く其后寛永に至り若衆歌舞伎といふものゝ起れり是浮世女舞
の后を受けしるものにて後世に悪く若衆に異り〳〵めて永禁
嘩方い暑く前と同〳〵舞台い能舞台よりも見苦しかり〳〵といふ是れ今の市村座
の初め然るに何時か此後に男色の禁風復起り赤醜聞あり〳〵との禁せられしる
の如く右十年計り経て此後者等を童ぬるに及び今度い只芸技芸一方に
力を入れ再び興行ハとて公許を得自ら芸の初と
も云来芝居の重はる役廻り老人よりも若衆観客の注意を叶ふとも〳〵
れい新く浮説をかふるに至り再び禁風と嬢しふり右種々力を尽し此道を
擴めんと企つる人あり〳〵が禁風常に纏ひつき離れさりしかい遂て其発達を害
せられ次斯くて慶治寛文（此切のまゝ）其等の間に聽是ひる〳〵の頃に及い市

川竹之縁初代市川團十郎等出る〳〵次に之と改良〳〵発達の道を開き且つ近松
氏此時より貞享元禄の頃に盛時を極めしかい遂に今日の幸福を見に至れ
り

浄瑠璃の起源及び変遷

次に浄瑠璃の沿革を述ん人世人の談る所
に據れい浄瑠璃い十郎のお通を祖とせられと三馬等の云ふ所に是れ決〳〵
然らば其起源い詳なりとお通の時代に失立ち既に存せりと（近年重
駒博士も此説なりと聞く）按るに其起源い享禄年中に在り〳〵如く当
時素より今日の如き楽器ありしにあらい唯一人位にて拍子の助けとなせるの
みされい酒宴の席に招れしる白拍子の如きものゝ如きもの（此
切下の如く曉き〳〵人あり、是に又浄瑠璃に似る異なる謡女といふものあ
り此説者い当時事らなの儀式に用ひられしり而〳〵酒宴の席ふとおい多く
浄瑠璃を用ひしもの、如く）之を譬ふれい当今の説教の如きものゝ如く

らんか斯くも興味ふき淨瑠璃い慶長の頃に至りて三味線と合いをるより恐ち盛にふれり

三味線

三味線い琉球の蛇三線より変ずるもの歟と言傳ふれども非はるら如し按ずるに慶長以前に葡萄牙人バーテレー（渡来の宣教師）とかいふものつくるものを長崎に商せり能く今の鼓弓に似て三線なれば此楽器も驢を用い線に引あつるものなるべきに京都に傳来せし折楽器のみにて驢ふりかい人々如何にして音立たせんと言ひ罵り終に其検校を招き試みしに職掌として耳慣れぬ撥をあてしにいとかふる音せしより用ひし者多かりき之を折衷してふりくる名ち今の三味線なり（蓋弓ふとい初め三線なりしより其調子解りに高くして聚くに堪えざりしより今日の如く四線とふせり）三味線出来しより淨瑠璃に合せてとかく手拍子とい異ふり面白き為め大に流行きたりされど淨瑠璃下こい来

管弦村失生日〜初め彼の奥い影（京都）傳来せし折具（帰〜ちい試い今の如く用ひらふに至らさるも知れも只鼓弓の姿に凄いり本初等一の楽器とふらさり〜ゆえ未知る（つらい思い失の山名とい此事ふらん

小野ゑお通い恰もよい代に出こと者にて三味線を持りて初めて淨瑠璃に合せるい此人ならんされい淨瑠璃の祖故お通とせしも強ち根ふ〜事にいあらず〜お通京都にて盛に興行せらるるに及び隣て諸方にも行われ江戸の如きい京よりも盛なりしといふ降つて寛永年間に至りて此節〜者薩摩源太夫其弟子櫻井丹波なる人固清兵衛等あり固い「きんぴらしゝ」（戸淨瑠璃）を作り其語ふ所当時の武士輩等に倣ひ極めて強き男最格なるもの（旬〜り櫻井の如きも親子最格強勇まく淨瑠璃をして聞ふり

此以下の如く記せるもの寛永年間より至り薩摩源太夫此技に善

〜〜く夢子に櫻井丹波なる者ありて堺町に初めて操り座を設け
八月丹波の大兵にして容貌狀貌共に大なり〜かい有名なる作者
岡清兵衛丹波に適せらるるの作なる心得にて「ふんしりし」を著
せり

其頃の発句

親たんば毎日岩を敲きわり

とかりいと〜知り得〜当時文藝界に對〜〜出佳人起り互に其力を爭
りといふ

然るに京都にて貞文の石売屋源左衛門初めて之を興行せり（浄瑠璃
の発祥は京都なれども盛んに江戸の方へ移せかりしなり）源左衛門の養子
に牛子に井上播磨あり其弟子に竹本義太夫あり共に浄瑠璃を工夫
せしめ近松門左衛門の筆に井上播磨の時代に出しり浄瑠璃時代に出しり浄瑠璃

を〜て盛ら〜め近松を〜て作詞近松しこう〜め〜ものあり殆り人形に
浄瑠璃物語を入れ〜と見へ盛〜浄瑠璃の発達に従ひ種々の新工
風伴ひ起れり京に於の頃流行せ〜操り芝居に其著〜きこうの当時
斯く盛なり〜と雖も今日の如く立派ふる物語の御色あるにあらず

近松の作に三変化あり

貞享

正慶頃い古き浄瑠璃に法れりされい書かるも趣向も真に古世の作なられかゝせるを四十歳位まゝつゝけり四ゝ五ゝ年位作の間に古き流を脱しゝ所謂近松風とゝしゝ新式を開けりかゝゝ結構配置いとも面白くなりゝゝ元禄より晩年即ち享保年間に至りて益々今作の如く作に筆をつけ行かきゝが神自在の境に達しけむいとめてふくゝゝ又今講ゝ『蟬丸』『ロ』ハ恰も新式と古式と交付せる間に作られたるものなり

蟬丸は初期作ハ元録十四年五月十日ゝ翁年四十九の時ゝ此作を趣向せるハ時ゝも竹本義太夫初めて官職を受領せるは四八日となん但ゝ官職とい藝人に賜いるものなれい俗に所謂吉田官ゝらゝ此太夫ハ竹本筑后掾博教といゝる人ゝ抑ゝ音曲の道の者 蟬丸を尊ふり延喜の帝の皇子に在ゝゝ音曲にたゝゝなりけるに因れるゝ

叔蟬丸を延喜帝第四の皇子とせゝい虚説へと学者の説定めれり真(まこと)に
宇多帝の皇子式部卿敦實親王と申奉る方の雅楽なり〜者にて有けり
琴〜〜優れ琵琶を愛〜ひけるなりと云ふ『はくが』の記に習ひ〜〜
蟬丸にあり〜〜云ふ山科に住める人なりと云ふ蟬丸に盲目にあら
ずも施基皇子より説を立つる習ふに虚ならむと云ふ
近松の作につき段を五つに分てる事に注目あるべし 第一段を発端に
〜〜〜第三段に切、眼目の意に当る故に第三段を基として前后に憑照
襯接せ〜む即〜〜第四段に道行く尚に左に分明にてるせむ

一　発端
二
三　切
四　道行
五

蟬丸　謡曲

諫鼓々々と刑鞭々々と顛倒せゝい音調とはかり〜の故に翁れ作中実に音
調を尊ひ〜苦心歴々と見る、『御恵徳』を『をろ〜』と云ふ昔〜に
曾〜云ひ〜加く『さる程にさても其后』とかけるを斯くも攻まり〜し、り
も『をろ〜』といふ太夫素讃ミに〜〜る句て三味線なくて此句を讃み
さ、に至り撥を鳴ちて故に此名はらむ但〜『をろ〜』あるゝ時代物
に限り世話物には最初に小歌をかきけるを例とせえれ三味線の前びき
あれゝく

諫鼓々々　の句ゝ手朝文將に出り文々に江相公と呼れ〜大江匡衡
々云ひ〜く
由ともおさ〜〜とかき〜故に其お音ば受けて治まると謂を取れり
現神を秋律君と讃ませり

交野の御野
をりはへて

山城にあり天子のお狩場なり櫻もあり
ハ「時延」いつまでも引きつゞきて